

Weekly Market Report

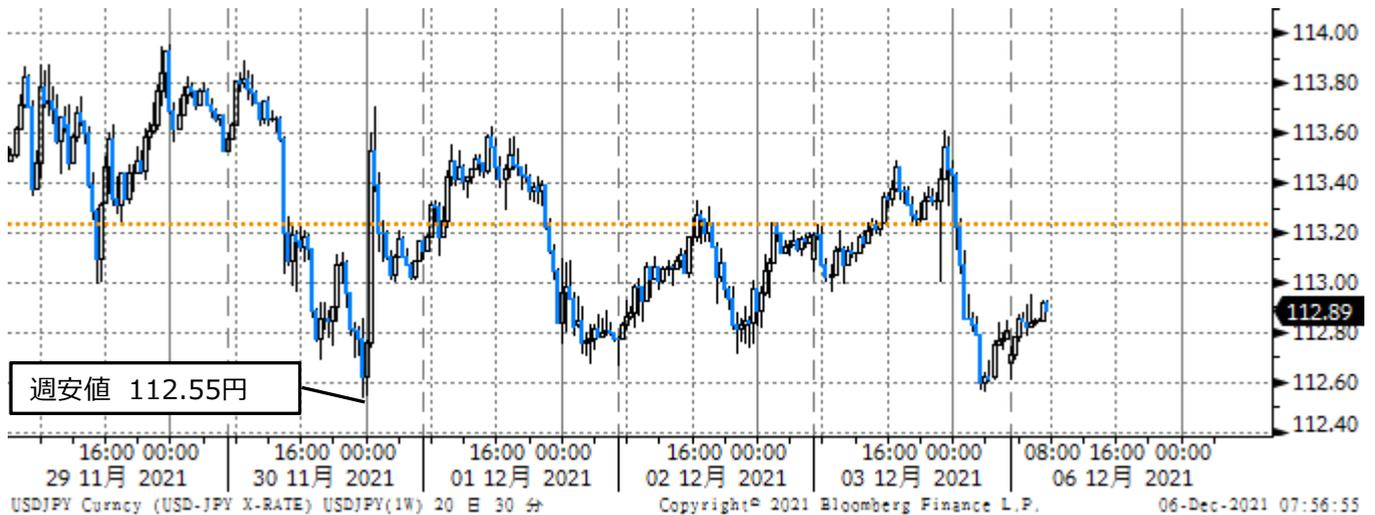
Dec.6.2021

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

パウエルFRB議長の証言で市場のドル高期待が高まる中、オミクロン株のヘッドラインには注目。

USD/JPY (1週間の値動き)



(出所) Bloomberg

コメント

先週のドル円相場は南アフリカで発見された新たな新型コロナウイルス「オミクロン株」を巡る懸念から、112円台まで下落する等リスク回避の動きが見られた。オミクロン株への情報が錯綜する中、ドル円は先週初113円台半ばからスタート。オミクロン株について、モデルナCEOが従来のウイルスと比較してワクチンの効果が弱い可能性がある点について言及すると、米長期金利の低下に伴いドル円も112円台後半まで下落。その後のFRBパウエル議長の議会発言が意外にもタカ派に転換したことが材料となり、ドル円は113円台半ばまで持ち直し。米雇用統計は強弱入り混じる内容となったが、その後の金利低下に連れる格好で112円台半ばまで下落して越週。当面の間、ドル円はオミクロン株のヘッドラインニュースに振られつつも、米国で早期利上げ観測が高まっていることから下値は限定的と考える。(市場営業部/山下)

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
12/8(水)	(日本) 第3Q GDP (前期比)	-0.8%
12/9(水)	(中国) 生産者物価指数	12.1%
12/9(木)	(中国) 消費者物価指数	2.5%
12/10(金)	(米国) ミシガン大消費者信頼感指数	68.0
12/10(金)	(米国) CPI除食品・I社株 [*] -(前年比)	4.9%

USD/JPY (5年間)



今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
嵯峨大輝	112.00 - 114.00	オミクロン株の不透明感がある一方、米利上げスケジュールには変更なしとの見方からレンジ内で動きが乏しい展開を予想。
三原大希	112.60 - 114.30	市場の注目が再び各国利上げ動向に移りつつあり、週末の米CPIなどの経済指標の結果に注目したい。

2. 円金利相場概況

オミクロン株の感染拡大及び米国利上げ前倒し観測の強まりからリスクオフムードへ。

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）



(出所) Bloomberg

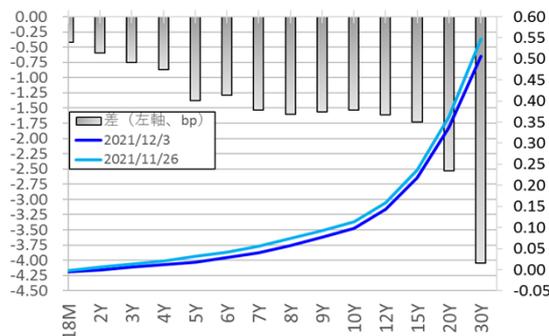
コメント

先週の10年国債利回りは0.05~0.08%のレンジで推移。米金利が低下するのに伴い、週末に向けて10年国債利回りも低下する展開となった。前週末は南アフリカで検出された変異株（オミクロン株）への警戒感からリスクオフムードとなったものの、バイデン米大統領のロックダウン再導入には繋がらないとの発言を受け、米金利の変動幅は限定的であった。しかし、パウエルFRB議長が議会証言で資産購入ペース縮小の早期終了の可能性を示したことや、米国内にてオミクロン株感染者が初めて確認されたとの発表により週央からリスクオフムードから金利低下圧力が強まり、0.05%台まで低下して越週。

今週の10年国債利回りは12月FOMCを翌週に控え、レンジ推移を予想。一方でオミクロン株に関する悲観的なヘッドラインには注意が必要。（市場営業部/治久丸）

金利スワップ変化（1週間）

(%)



5年円金利スワップ推移（5年間）

(%)



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
内田直樹	0.030% - 0.070%	今週の円金利は、オミクロン株への警戒感から、リスクオフ継続を予想。米金利底打ちによる、金利反転の可能性には留意。
加藤祐樹	0.040% - 0.070%	ワクチン効果や感染者数といったオミクロン株関連の材料に影響されそう。FRBパウエル議長のタカ派姿勢にも注視。

3. 今週のトピックス

新興国通貨動向（トルコ、ブラジル、ロシア）

インフレ対応の利上げが新興国通貨を下支え。利下げを進めるトルコリラには引き続き大きな売り圧力

<新興国通貨の動向>

米国FRBによる金融政策の正常化が進められる中、為替市場ではドル買いの流れが継続しており、新興国通貨全体に対する売り圧力は徐々に強まってきている。南アフリカで発見された新型コロナウイルスオミクロン株への懸念も新興国通貨の重しとなってくる。ただし、トルコを除いて既に利上げを進めている新興国が多いことや資源高の恩恵もあって新興国通貨の中でも強弱は分かれており、ここではトルコ、ブラジル、ロシアの通貨動向についてみてみたい。【図表1-3】については、それぞれの国の年初来対ドルパフォーマンス、インフレ動向、政策金利を示している。

<トルコリラ>

トルコリラについては、過去最安値を更新し続けている。トルコ中央銀行は11月にも政策金利を1%引下げて15%とし、9月から3か月連続の利下げで合計の利下げ幅は4%となった。トルコ中銀は12月で利下げを終了するとしているが、景気を刺激するために低金利政策を指向するエルドアン大統領からの圧力は弱まりそうにない状況だ。11/23にはエルドアン大統領から政策金利の引き下げとトルコリラ安を容認する発言があったことでトルコリラ円は8円台まで急落している。トルコ経済はここ数年の通貨安による輸入物価の上昇に加え、資源価格の高騰もあってインフレ率が年率20%程度まで上昇しており、複数の都市で反政府デモも起きている状況だ。トルコ中銀は為替介入で通貨安に対応しているが、トルコリラの売り圧力は当面継続するとみられる。

<ブラジルレアル>

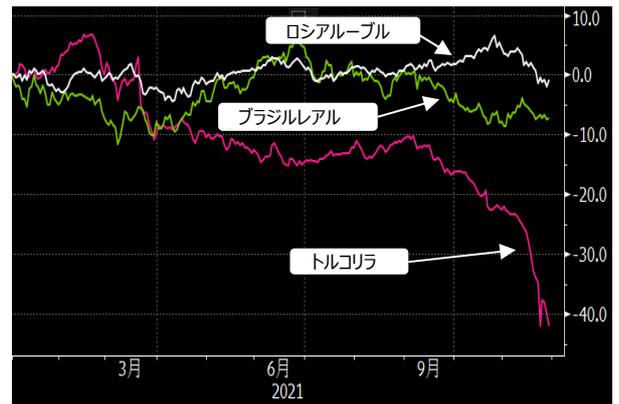
ブラジルレアルについては足元で弱含む展開となっている。ブラジルでは資源価格の上昇や深刻な干ばつの影響で燃料や食料品などの値上がりが続ぎ、10月のCPIは前年比で10%以上の上昇となっている。ブラジル中央銀行はインフレへの対応策として2021年3月以降利上げを継続しており、10/27の金融政策会合では政策金利を1.5%引き上げて7.75%としている。ただし、ボルソナロ大統領は新型コロナウイルス感染拡大への支援として現金給付を大幅に増額する方針を打ち出しているため、財政赤字の拡大懸念が通貨安の背景となっている。ブラジル中銀の利上げは当面継続されると見込まれるものの、産出資源の主な輸出先である中国の景気減速懸念もあり、ブラジルレアルは当面上値の重い展開となりそうだ。

<ロシアルーブル>

ロシアルーブルは原油や天然ガスなどの価格上昇もあり、堅調に推移している。世界的な資源価格の上昇を受けてロシア経済の回復は続いているものの、国内ではインフレも加速しているため、ロシア中央銀行は10/22の金融政策会合で0.75%の大幅利上げを行い政策金利を7.50%としている。ロシア経済が成長トレンドとなる中でも利上げは継続される見込みであり、今後もロシアルーブルの底堅い推移は続きそうだ。

(チーフ・マーケット・ストラテジスト／諸我 晃)

【図表1】年初来対ドルパフォーマンス



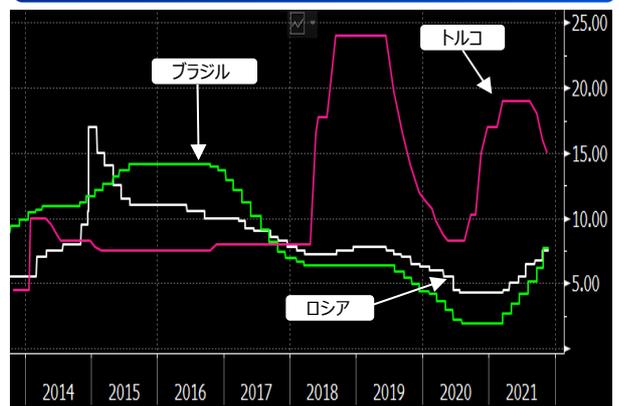
(出所: Bloomberg)

【図表2】トルコ、ブラジル、ロシアのCPI（前年比）



(出所: Bloomberg)

【図表3】トルコ、ブラジル、ロシアの政策金利



(出所: Bloomberg)

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会